

# 関節モビライゼーション臨床報告 3月度 (2018)

## 【肘】

患者氏名	日付	運動部位	効果	詳細
Y.Yさん 歳 男性	3/1	肘	上肢の 重だるさ ○	両肩から上腕にかけての重だるさが強い。端座では少なく、臥床で増悪。肘の伸展で若干の制限があり、上腕二頭筋の過緊張もあり。施術後、伸展改善し、臥床での重だるさが軽減されていました。
	3/8	肘	上肢の 重だるさ ○	重だるさのため、臥床で頻繁に右肘の曲げ伸ばしをしていたが、肘の施術後は肘の屈曲伸展をしなくなっていました。他動での肘伸展制限も改善がみられました。
	3/15	肘	右肩痛 上肢痛 △	肘の可動域は改善しています。重だるさのため頻繁に肘の曲げ伸ばしを行っています。施術後はやや動作がスムーズになったようですが、重だるさは変化ありません。
	3/22	肘	上肢の 重だるさ ○	右上肢は施術前後での変化はみられず。左上肢は過緊張が緩和し、肘関節の屈曲伸展がスムーズになっていましたが、頸部の重だるさの改善までは至っていません。
Y.Kさん 歳 女性	2/28	肘	手指の 屈曲拘縮 ○	頸椎損傷による麻痺。肘関節までの可動は問題なく、手指は動作緩慢で、指は伸展制限が顕著。上肢、肩全体に過緊張がみられ、左上肢は拳上制限が若干あり。施術後に緊張の緩和がみられました。
	3/7	肘	手指の 屈曲拘縮 △	前回の施術後から、日差あるものの比較的過緊張の緩和した状態が維持されています。手指の自動運動は緩慢ですが、他動では容易です。施術後には肩周囲の緊張緩和しましたが改善実感はありません
	3/14	肘	手指の 屈曲拘縮 ○	前腕の内ひねりはスムーズですが、外ひねりに制限があり。肘関節の施術時にもやや痛みが出ていましたが、施術後に外ひねりは改善がみられ、手指の強張りも軽減して、本人実感もありました。
	3/21	肘	手指の 屈曲拘縮 △	気温低下の影響があるようで、全身の緊張が非常に強く、手指の可動性が著しく乏しい状態。施術後に若干の緩和がみられるも、依然として自動、他動共に手指の可動は制限が顕著にみられます。
A.Yさん 90歳 男性	3/13	肘 頸部	右肩痛 ○	右肩の棘上筋腱の断裂の既往あり。安静時痛はなく、冷えると痛みが出現し増悪。上肢挙上150度まで。肘関節の屈伸は良好だが、外ひねり制限あり。施術後に外ひねりの改善がみられました。
	3/20	肘 頸部	右肩痛 △	特定動作で右肩痛が出現。肘の外ひねりも良好。施術後、肩周囲と上腕の緊張緩和がみられ、他動での可動がスムーズになりました。本人の改善実感は乏しいです。
T.Fさん 歳 女性	3/16	肘	右手指 屈曲制限 ○	右手指の屈曲制限で握り込めない。肘関節にもやや可動制限がみられ、痛みがなし。施術後肘の可動性は改善がみられ、掌屈も改善がみられ、本人も握りやすくなったと実感あり。

○：一定の効果、実感あり

2→1：施術前後の痛みの変化（本人にとっての最大痛値を5に設定）

△：効果の本人実感があまりない

## その他 臨床報告

### 「効果がみられなかった症例」

肘関節そのものに何ら異常がみられない症例への施術については、ある程度の緊張緩和効果はあったものの、顕著な効果はみられませんでした。膝関節などは、膝の可動性が正常であっても、モビライゼーション後には軽くなった。などの効果実感があった症例もありましたが、今回の肘モビライゼーションについては、現在のところそういった実感もみられませんでした。

同一患者であっても、効果の出る時、出ない時があり、明らかに可動制限があるといった場合には効果が出て、翌週訪問時、その改善した状態を維持できていた症例がいくつもありました。

それについては、下肢と違い、体重を支持する必要がないため、悪化する度合いが低いのかもしいかなと考えます。

## 考察

今回、肘関節そのものに痛みがあった症例はなく、直接的な効果の判定はできませんでした。しかし、手指や肩関節といった肘関節に隣接する部位への影響を、臨床で実感することができました。肘の屈曲伸展や内外ひねり（回内外）の動作や前腕、上腕、肩関節周囲における筋緊張の低減などは多くの症例で出やすい効果でした。ただ、可動性の改善、筋緊張の低減など、患者様本人による効果実感が乏しい場合がいくつもあり、劇的な効果を発揮する症例も今回はありませんでした。

様々な要素が複雑に絡み合う上肢帯において、これが唯一の原因。といったものではなく、複合的な原因で現在の症状が起きている場合が多く、いくつもの視野を持ち、患者様の状態を判断していく必要があるのだと感じました。

肘関節モビライゼーションは、技術的に決して難しいものではなく、ある程度の要領をつかめば行える技術です。そのため、他施術者へ落とし込むことも十分に可能です。それぞれの施術者が、症例の判断を的確に行い、他の技術と組み合わせて治療することで、これまでよりもさらに治療の幅を持たせることが可能になると考えます。

2018.3.31 酒見